

琵琶湖総合保全整備計画（マザーレイク 21 計画）＜第 2 期改定版＞
ふりかえり報告書（素案）から抜粋 評価結果一覧

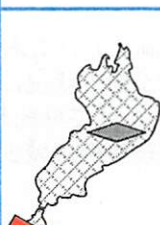
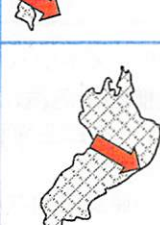
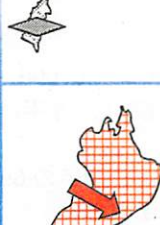
「状態」の評価

	よい 目標値を達成している等、よい状態にあることを示す
	悪くはない 目標値には達していないが、悪くはない状態にあることを示す
	悪い 目標値には遠く、悪い状態にあることを示す
	評価できない データが不十分、見方により変わる等の理由で評価ができないことを示す

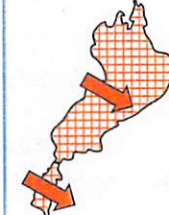
「傾向」の評価

	改善している 経年的に改善傾向にあることを示す
	変わらない 経年的な傾向が明確には見られないことを示す
	悪化している 経年的に悪化傾向にあることを示す
	評価できない データが不十分、見方により変わる等の理由で評価ができないことを示す

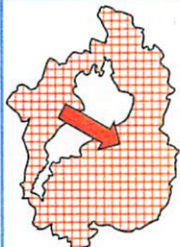
湖内

(1) 琵琶湖の水の 清らかさ		○透明度および全窒素、全りんで一定の改善傾向が見られます。 ○CODは、流入負荷削減に連動した減少傾向は示さず、北湖は平成 10 年度以降高止まり、南湖は上昇傾向にありましたが、平成 25 年度に低下後、横ばい傾向にあります。
(2) 琵琶湖の植物 プランクトン		○淡水赤潮は、平成 8 年頃までは多発していましたが、その後減少傾向となり、平成 22 年以降発生数はゼロとなっています。 ○アオコは、昭和 58 年に南湖で初めて発生して以降、現在まで、ほぼ毎年発生が確認されています。特に、平成 28 年度は過去最多の発生日数となりました。
(3) 琵琶湖の底質		○底質の状態を示す「強熱減量」は、毎年定期調査では北湖ではわずかに、南湖では増加傾向が見られています。 ○10 年に 1 回程度の「強熱減量」の多地点調査では、北湖では横ばいですが、南湖で増加傾向にあります。 ○南湖東岸沖では深い窪地が多数形成されており、夏季には貧酸素状態となり、窒素やリンなどの濃度が上昇するなど、水質が悪化しています。
(4) 底層の溶存酸素 濃度（底層DO）		○北湖今津沖中央の底層DOの年度最低値は、において、平成 11 年度頃を境に、2 mg/L を下回る貧酸素状態が確認される年の頻度が増えています。 ○平成 30 年度冬季には、例年冬に琵琶湖北湖で見られる全層循環が、観測史上初めて確認できず、令和元年 8 月には北湖第一湖盆水深 90m で底層DOが 2 mg/l を下回り、底生生物の死亡個体が確認されました。
(5) 琵琶湖漁業の 漁獲量（魚類等）		○漁獲量は、昭和 58 年の 3,447 トンから、平成 30 年には 614 トンにまでに減少しました。 ○アユの産卵数が、平成 24 年には平年の 6% の 7 億粒に、平成 29 年には平年の 3% の 2.5 億粒になるなど、これまでにない異常な状態が見られました。 ○水草の除去や、外来魚駆除、種苗放流などの取組により、ニゴロブナやホンモロコの漁獲量には回復の兆しがみられます。

湖辺域

(1) 琵琶湖の外来魚		○外来魚の推定生息量は、平成 19 年に 2,132 トンでしたが、平成 30 年度は 508 トンとなっており、平成 19 年度以降で最少となりました。 ○近年、駆除量が著しく減少しており、新たな対策の検討・実施が必要となっています。 ○積極的に駆除を行ってきたオオクチバス、ブルーギルが減少する一方で、チャネルキャットフィッシュの捕獲が増加しています。
(2) 琵琶湖のカワウ		○春期の生息数は、平成 20 年度には約 38,000 羽程度いましたが、平成 21 年度から減少し始め、平成 30 年度春には、約 6,600 羽となりました。 ○近年、大規模コロニーでの生息数は大幅に減少してきています。 ○生息区域が分散化し、ねぐら、コロニーの箇所数は増加しているため、今後も継続的な対策が必要です。
(3) 希少野生動物種		○「滋賀で大切にすべき野生生物～滋賀県レッドデータブック」の 2015 年版では、絶滅危惧種、絶滅危機増大種、または希少種に 719 種の動植物種が選定されました。 ○「滋賀で大切にすべき野生生物～滋賀県レッドデータブック」に掲載される絶滅危惧種、絶滅危機増大種、または希少種の数が増加傾向にあります。
(4) 琵琶湖のヨシ		○昭和 30 年代に約 260ha あった琵琶湖および内湖に分布するヨシ群落は、平成 3 年度には半分以下の約 127ha にまで減少しました。 ○平成 30 年度末におけるヨシ群落の面積は、約 262ha にまで回復しています。 ○ヨシ群落において、巨木化によりヤナギの比率が増大しています。
(5) 琵琶湖の水草		○平成 6 年の大渇水以降、南湖における水草の増加が著しく、夏になると湖底の約 9 割を水草が覆う状況にあります。 ○近年では、春先から夏場にかけて継続して透明度が低かったこととも重なって、水草の繁茂状況は減少傾向となっています。
(6) 琵琶湖の侵略的外来水生植物		○平成 25 年頃より、オオバナミズキンバイやナガエツルノゲイトウといった侵略的外来水生植物が急激に増加しました。 ○駆除により、平成 28 年をピークに生育面積は大幅に縮小しました。 ○北湖において、新たな生育が確認されており、予断を許さない状況です。
(7) 琵琶湖漁業の漁獲量（貝類）		○セタジミの漁獲量は、かつて 6,000 トンありましたが、漁場の環境悪化によって減少し続け、近年は 50 トン前後で推移しています。 ○主要漁場での生息密度も昭和 24 年の 60 個体/㎡から令和元年の 0.34 個体/㎡と減少しています。

集水域

(1) 河川の水質		○河川の水質は、環境基準の達成率が向上しています。 ○平成 29 年度における BOD 達成河川率は 96%とほぼ全ての河川で環境基準を達成しており、近年は、高水準で横ばい傾向にあります。
(2) 森林の状況		○人工林の森林整備にあたって、これまで取り組んできた若齢期の間伐に加えて、間伐材の搬出・利用を行う「利用間伐」が増加しています。 ○シカの食害等による下層植生の衰退、局所的な集中豪雨による山腹崩壊や流木・流出土砂の発生といった新たな問題が顕在化しています。
(3) 林業・木材産業		○木材の生産量は、近年は合板用材やチップ用材などの需要増加に伴い、近年増加傾向にあります。
(4) 環境と調和した農業		○環境こだわり農産物の栽培面積は、平成 30 年には 15,335ha にまで広がり、水稲では 44%が環境こだわり米として栽培されています。 ○県内の化学合成農薬の使用量は、平成 12 年と比較して約 4 割削減され、流出負荷量は通常の田んぼと比較して窒素で 41%、リンで 27%の削減となっていることが確認されています。
(5) 在来生物の回復		○様々な生息環境において在来生物の減少傾向が見られます。 ○「魚のゆりかご水田」などの小規模な自然再生への取組も地域の生物多様性保全に大きく貢献しています。

つながりへの配慮

(1) 魚のゆりかご水田		○平成 21 年までは順調に取組面積の拡大が進み、110ha に達しました。 ○平成 29 年度からは、営農活動として位置付けた支援も併せて行うことで、取組面積の拡大が見られるようになってきており、平成 30 年には 140ha を超えています。
-----------------	---	---